

## 内外交差点

# 真っさらな目で「光を観る」

## 新しい観光タクシーコースへの挑戦(前編)

森田 玲子氏 (姫路タクシー社長) 第11/12回

如月や

澄み切った冷たい空気の中に春のかけらを探す。

色とりどりの花のような学生が姫路タクシーへやって来た。兵庫県立芸術文化観光専門職大学の女子学生8人である。創立4年の新設校をご存知の方は少ないだろう。学長は劇作家で演出家の平田オリザ氏、兵庫県豊岡市にある学舎を見学に行かせていただいたが、豊かな自然の中に最新鋭の音響設備や舞台が備わる。大学名からして「芸術文化」と「観光」の二つの学部が存在するのかもしれないがそうではない。舞台俳優になりたい学生も観光を学ぶし、ホテルマンになりたい学生も演技の勉強をする。学生の受け入れを考える過程で平田オリザ氏とお話したが、彼が最も重要視するのは「コミュニケーション能力」だと知り、そのような学びを得た学生ならば、と受け入れを決めた。私はコミュニケーション能力と問題回避力はほぼほぼイコールだと考えている。それほど重要視している学習結果を間近で見たいという興味が大きかった。

今回の話は兵庫県の中播磨県民センターからの依頼であった。以前、神戸のタクシー会社が実習生を引き受けていたが、従業員不足で負担が大きくなり今年から辞退されたとのこと。観光と交通は密接でタクシー事業者はどうしても受け入れ先として参加してほしい、という強い要望であった。私は姫路市や兵庫県からの依頼は出来得る限りお受けすると決めている。それは公共交通機関を名乗るものとしての自負があると同時に、自分の生まれ育った土地の役に立ちたいという気持ちがあるから。ここ数年だと鳥インフルエンザの輸送も、コロナ搬送も全て引き受けてきた。学生の受け入れはそれらとは全く性質を異にすることで初めての経験ではあるが、次世代育成にかかわれるチャンスである。かくして10日間に及ぶ実習期間は閑散期の2月という条件でお受けすることになり、笑顔弾ける学生が姫路タクシーにやって来た。

大袈裟な表現かもしれないが、われわれにとって未知の領域への挑戦だ。まず大まかなカリキュラムを組む。最終目標は「新しい観光タクシーコースの完成」

と決まったが、そこにどうアプローチしてもらおうか。オリエンテーションの後、最初に弊社で最も売れている「姫路城パノラマコース」を体

験してもらった。多い日は1日に10本も注文がある人気商品であるが、私の目に映るそれはもう単なる「売れる商品」であった。ところがどうだろう、学生たちの輝く瞳は心から観光タクシーというものに、そしてその中心にある姫路城に感動している。別日に見学した広峰神社の昇殿参拝も生まれて初めてと感激、モントレ姫路の真っ白なチャペルやスイートルームの見学に至っては「お姫様みたい」「初めて結婚したいと思った」とかなり興奮した様子ではしゃいでいた。

嗚呼、私はこの感動の心をいつどこに置いて来てしまったのだろう、彼女たちの嬉々とした様子を見てそう消沈した。彼女たちの心を揺さぶるもの全てが私にとってはもう当たり前風景になってしまっている。

また、フィールドワークの一環で姫路市役所に山田基靖副市長を訪ねて観光と就職活動に関してお話をいただいた。立派な市役所の応接室に緊張の面持ちが初々しい。また姫路で400年に渡る会社経営をされ、正にこの地域の経済と文化の両面を支えてこられた株式会社シマヤの高島隆三郎会長にも播磨の歴史を講義していただいたが、耳慣れない言葉にも一生懸命取り組む学生たち。講師のお二方は私と同様、学生の学ぶ姿勢に感銘を受けられた。

観光とは「光を観る」ということである。光とは人を照らし、その目を惹きつけ心を揺さぶるものであろう。「姫路タクシーは観光に注力しています」などと言いながら、その社長がこんなことでお客様に姫路の魅力を最大限にお伝えすることなんて出来ないのではないか。彼女たちを受け入れて最初の衝撃はこのようなものであった。

私も真っさらな目に立ち返ろう、そう思った。まず大学生は観光タクシーも時間制貸切料金も知らなかった。他の学生にアンケートも取ってくれていたが同様の結果である。タクシーのイメージは「高い」というものが一番にあった。これほど時間を有効活用できて、人数によってはリーズナブルな観光交通手段を知らないなんてもったいない！そう言う学生とわれわれはこの視点のアプローチでコース作りを始めた。

